

講演「里山資本主義で元気な地域づくり」

株式会社日本総合研究所 調査部 主席研究員

株式会社日本政策投資銀行 地域企画部 特任顧問 藻谷 浩介



(この原稿は講演を元に当センターが文章にまとめたものです。)

I 「里山資本主義」とは何か？

昨年、「里山資本主義」という本が出版されました。さらにその後、NHKにて「里山・里海」シリーズが放送されました。私も出ていたのでご覧になった方もいるかもしれません。もともとはその番組ディレクターの井上さんが「里山資本主義」という言葉を考えました。最初は何のことか分からない言葉でしたが、番組を撮影するうちに何が「里山資本主義」かというコンセンサスができてきました。それは、「里山資本主義はマネー資本主義の欠陥を補うサブシステムである」ということです。

“里山資本主義”とは何か？²

「マネー資本主義」の欠陥を補うサブシステム（保険）
「善意と資源とお金の循環」で、安心・安全を増やす

！ 里山や離島に眠る、金銭換算すると無価値の資源
①耕作放棄地、②立木、③半端モノ/農産品、④退職者、⑤野獣...

！ でもこれを資本として活かすと、水と食料と燃料
が一定程度自給できる（←農林漁業地域では常識ですが...）

①生活費を減らせる、②エネルギー自給率が高まる、③捨てていたものが、場合によっては高額で売れる / あるいは物々交換できる

！ さらには成熟社会の安心・安全を増す効果も！

④元気な高齢者が増える、⑤若夫婦の田舎移住が子供を増やす、
⑥周囲と絆を持つ人間が増える、⑦マネー資本主義の機能不全に対して、ハックアップを得ることができ、天災時等に効果を発揮する

世の中には、マネー資本主義というものがあります。資本主義というのは、全てがマネー資本主義というわけではなく、いろいろあります。今、日本人の多くの方は、亡くなる瞬間の貯金額が自分史上最高になっています。このように年金が入るたびに貯金額が少しでも増え続けて、ほとんどお金を使わない人がマネー資本主義です。自分はお金を使わずに貯金がたくさんある人は、日本にしかあまりいなかったのですが今、世界中に激増しています。特にウォールストリートのハゲタカの人たちは、稼いでいるのに実は全然使わず、お金を貯めることが人生の目標になっています。貯めている人は、様々な企業に投資をし、「配当や株価を上げろ」と言います。

今、お金を貯めている人がえらいから政府も株価を上

げるとすごく褒められます。株価が上がると株を持っている人の財産が増えるから持っている人は満足します。しかしながら、株価が上がる一方でガソリンが上がるなどの副作用が出ています。

使わずに貯めているお金が増えていくのは安心安全も含めて楽しいと感じてませんか。しかし、お金を使うと誰かの収入になり、そのおかげで経済は回っていきます。お金を貯めている人の中でも「不安だから貯めている人」と「お金さえあれば可能性があると言いながら可能性を一切使わずにお金だけを増やしている人」との2種類に分かれています。マネー資本主義とは後者のことです。

さて、アベノミクスは異次元の金融緩和を行いました。それで起きたことは株価だけが日経平均約9千円から一時1万6千円まで上がりました。株を持っている人は大儲け、お店でモノを売っている人は特に儲けが増えていないし、働いている人も儲けていません。外国でモノを売っている企業もそんなに儲けたわけではありません。実体の経済としてはほとんど何も関係ありません。アベノミクスがこれほどに褒められていることで分かる通り、世の中は基本的にマネー資本主義が支配しているわけです。株価が上がったときにあれだけお金を儲けたのにモノを買わないので、モノの売上がほとんど増えません。お金を持っている人が一番えらいというシステムになっているというわけです。

マネー資本主義の人たちは「景気が回復して株価が高くなると不安だ」と言います。「もっと株価を上げてほしい」と言い続けます。そのうち、国の借金が膨らみ国の借金が一人あたり8百万円を超えてしまいました。これはやはりお金を貯めたいという考え方自体に欠陥があり、それを補うシステムが必要なのです。もうちょっとお金とは関係のないところで安心安全を確保した方がいい。お金は貯めていないでなるべく使い循環した方が

いい。いざとなれば大丈夫というシステムをつくった方がいいのです。

具体的には、里山、離島に眠る金銭換算すると無価値の資源があります。例えば、耕作放棄地、立木・流木、半端モノの農産品、さらに退職者（退職してお金を稼いでいないから金銭換算すれば無価値。現状、フローで稼いでいない）、野獣（猪や鹿）です。このようなモノを使って、「ある程度の水と燃料と食糧を自給しましょう」ということが里山資本主義です。例えば、生活費として少々自分で作ったもので賄ったり、火を燃やしても燃料となる油を買わなかったり、捨てていた半端モノの農産品の場合によれば高く売ります。高く売ったお金を貯めていけばマネー資本主義ですが、使えば、お金の循環となります。あるいは、みなさんがよくやっている物々交換を行います。田舎なら誰でもやっていることをみなさんもう少し見直した方がいいということです。里山資本主義の本を出して驚きましたが、東京などの都心部には生まれた時からこういうことを一度もしたことがない人がだいぶ増えています。そして、お年寄りモノをつくったり売ったりしていると元気になります。都会のお年寄りより田舎のお年寄りの方が元気です。何より震災のようなことがあった時に自分で水や食料や燃料を自給できている人がある程度いることで非常に社会は強くなりますが、全くいないと3日でお手上げということになるわけです。

限界!マネー資本主義:「簿外資産」の消費³

! 簿外資産①化石燃料: 長期的に不足し、値上がりへ

! 簿外資産② 土壌と水と大気:

← 土壌・地下水収奪型の大規模低価格農法が世界制覇
← 農薬などの化学物質による汚染も年々深刻化
← CO₂の増加 ← 浮遊物質の増大 ← 放射能汚染

! 簿外資産③ 子供:

← 子育てを犠牲にした経済成長が東アジア中で進展中
← 戦後日本の「家に帰らない企業戦士」はその最初の例
(企業戦士+専業主婦の増大で日本の出生率は激的に低下)

! 簿外資産④ 治安や道徳などのソーシャルインフラ

← すべてを自由市場での取引にした結果、絆が崩壊
← 生み出した価値 < 交換で手に入れた金銭 という人の
方が、稼がない人より偉い、という腐った過念の普及

「なぜ里山資本主義をしなければいけないのか」と言うと思っているより世の中は危ないわけです。まず、「化石燃料（石油、石炭、ガス）」は、足りません。それらがなければ原発で何とかすればいいと言いますが、ウランは無尽蔵ではなく、実は石油よりありません。少ないからどんどん値上がりします。

もっと怖いのは「土と水と大気」です。これらは日本ではあまり損なわれていないので日本人は意識していません。世界的にはオーストラリア、アメリカ、カナダで土を削り地下水をくみ上げて何億年かけて溜まった地下水を一気に使い果たして農業をやっています。それで「安い農産物ができました」、「日本はそれと競争しろ」と言っています。競争するのはいいですが、とても今のやり方ではもちません。たぶんあと10年20年のうちに農産物はどんどん値上がりすると思います。マネー資本主義の人たちが今、何億年もかけて溜まった土や地下水を掘り起こし、そこで得られているものは貯金です。そのように学校で教わったからお金をたくさん貯めた人がえらいというのがマネー資本主義です。

これらとは別に「子供」の問題があります。先ほど退職者が出てきましたが、退職者がどんどん増えているのに子供はどんどん減っています。なぜかというとお金にならないから、むしろお金がかかるからです。マネー資本主義がだんだん増えてきたから貯金は何億円もあるが、孫は1人もいないという人がすごく増えています。田舎に残って百姓をして子供が3人いるより、東京に行って超エリート会社員でもしかしたら役員になれるかもしれないが、子供はいない。親は子供がいい学校にいい会社に入ったという見栄を張って大満足というのが、マネー資本主義の一形態です。

このように現在「土壌と水と大気」と「化石燃料」は、とりあえず今のうちに使い切ってしまうぐらいの感じで使っていますのでいずれ値上がりします。これを経済学の人には、「いずれ必ず経済学的に言うとは均衡する。どこかで値段が高くなれば使わなくなる。子供が減りすぎて困れば、どこかで増えるようになる。だからとりあえず今は、好きにやらせてください」と説明しています。私の考えでは、経済学的には均衡するとは思っていますが、いずれ人類がいなくなることで均衡すると考えています。散々好き勝手やった結果、子供がいなくなって人もなくなり、石油などを使い尽くしてしまい、何億年経ってようやくまた石油が再生産される。経済学的には、おそらくそのような均衡になります。そこには、経済学上、人間が生存できるという保証はどこにもありません。それに対して里山資本主義は、「マネー資本主義的には価値がないと思うものを活用して3%でもいいから自給し

ておくところと、世の中が変わります」という話です。

II 実践①木の燃料利用

実践① 木の燃料利用

きっかけは技術革新:

！ 石油缶を再生利用した手作りのエコストーブ

→ 少量の木切れを完全燃焼させて、おいしく煮炊き+暖房。
→ 広島県庄原市の和田さん(過疎を逆手に取る会)の仲間が発明。

！ 木質バイオマスペレットによる発電

→ 集材工場の副産物(産業廃棄物)である木屑をペレットに成型し、専用ボイラーで燃やすと、極めて高効率の発電が実現
→ 集材工場があれば、灯油や重油よりコストも何割か低くなる

技術は既にあるが、課題は:

！ 日本では生コン・鉄骨・新建材が全盛:頑丈で火にも強い
集材材建築がなかなか普及せず、木屑がない

！ 建築基準法・消防法などの規制が時代遅れ

！ 国産材は高価(?)で、集材材の原料は専ら外国産材...

NHKの番組の中では、「木を燃料にしよう」という話がたくさん取り上げられていました。その中で一番先端的なものは木質バイオマスペレット発電というものです。木質バイオマスとはただの木を燃やすということです。ペレットとは、木屑を棒にしたものでよく燃えます。

家庭で使えるものでは、まきストーブは非常にあったまると言われています。特に日本家屋のすごく寒い家には、まきストーブがあると遠赤外線で大変あたたかいです。エアコンや石油ファンヒーターと違うのは遠赤外線がサウナと同じで非常に体を暖めます。ペレットストーブは、石油ファンヒーターにそっくりな感じですが、石油の代わりに木を使っているファンヒーターで、まきをくべたりしないでいいものです。ペレットを入れておけば自動的に減って行って、ほとんど油と同じように扱えます。まきストーブは煙突をつけなくてはいいませんが、ペレットストーブは普通の石油ファンヒーターと同じで外に排気するものをつけておけば、十分なのです。

今、円安になったため日本全体は赤字になりつつありますが、そのため自然エネルギーの採算が取れ始めるという逆現象がおきています。灯油がだんだん高くなるので、ちょっと前までまったく採算が取れなかったペレットが、今、あちこちでお聞きするとだいたい灯油と同じぐらいの値段になってきています。

ペレットストーブは本体が30万円ぐらいで高く、本体の設備投資が回収できません。でも、もしみなさんが死ぬ時に30万円の貯金を使い残して死んでいると思ったら今、ここでペレットストーブを買えば、それ以降は灯油代とペレット代は同じです。おそらく今後、灯油代

は値上がりしますので、ペレット代の方が安くなっていく可能性があります。そして、石油をこぼすと嫌な臭いがしますが、ペレットは乾いていますし、すごくいい匂いです。燃えた後の排気は、外に出るので室内は全く臭くなりません。昔の木を家の中で燃やしていたのと全く違います。日本でもこのようなことをやっている人はいますが、日本では木屑があまりありません。木屑が発生しないと、一から木屑をつくってペレットにするのでお金がかかります。今、間伐材からペレットをつくっていると、石油と値段が同じぐらいになります。

もし、木がたくさん売れていて木材工場がある場合は、木屑が自動的にたくさん発生するので、木屑がただで手に入る場合、今のところ灯油の4割ぐらいでペレットが作れる例もあります。つまり、世の中で普及しない理由は、木屑がないからです。木屑がないのはみなさんが家を建てる時に生コン、鉄骨、新建材ばかり使い、木が使われないからです。

柱や梁などを全部、木で建てる新技術が最近すごく出てきています。それを使うと木屑の量は増えます。木を使うときでも日本では普通、外国の木を使っています。国内産の木は高いと言われており、質が低いという弱点がモノによってあります。でも、質がいいやつもなぜか買っていません。そして、外材も含めて木で作ればいいのに、生コン、鉄骨、新建材で考えもせずに機械的に建てています。その結果、木屑がないので灯油より安い燃料が本当は手に入るところが入らないという悪循環になっています。建築基準法と消防法の規制が時代遅れだったので、ついこの間までは木屑が出るのもっと木で建てようと言っても建てられませんでした。木の建築物が燃えなくなったので、昨年、法律が改正されて日本でもできるようになりました。もうちょっとで、みなさん気がつけば再評価されて変わっていくところまで来ています。しかしながら、頭の中身が全く入れ替わらないので木の利用が進みません。それは、建物を建てたりお金を出している側の人間がだいたい60～70代の男性だからです。この人たちが悪いと言っているわけではありませんが、60～70代の男性にはある種の特徴があって、車が大好きな世代、鉄腕アトム世代です。鉄腕アトムに描かれた未来都市に木造建築物はゼロで、全部ガラスと金属でないと近代的ではないと頭から思い込んでい

る世代です。実は、若い人ほど木造でいいと思っています。ヨーロッパでは、ここ10年ぐらいで木造建築が急速に増え始めています。

林業先進国 (中欧の) オーストリア⁵

日本より豊かな中欧の小国:

！人口は東北6県程度、一人当たり所得は1.5倍

→ 天然資源もないアルプスの山国だが、日本より豊か
→ 日本に対しても貿易黒字(スワロフスキーのガラス工芸が有名)

！過去10年ほどで林業大国になった

→ 年間で自然に再生される森林資源の70%を利用
→ 木は集成材に加工し、低層・中層建築は木造が当たり前
→ 年間に4~5000億円の木材資源を輸出し、外貨を稼ぐ
→ 林業は収入の高い職業として若者に人気

！自然エネルギー大国

→ エネルギーの3割弱が自然エネルギーで自給されている
→ 原発を作ったが稼働前に廃止し、現在は憲法で原子力を禁止
→ 木屑を使った木質ペレットの利用が普及、価格も石油の半分

例えば、オーストリアは、国土の15%しか木が生えていないのに、木をどんどん切って売るということを始めました。今、年間4~5千億円の木を売って外貨を稼ぐまでに至っていて、産業的にはかなり大きくなっています。そして、林業は収入の高い職業として若者の人気になってきました。今の林業というのは、巨大な機械を使って危ないですが、カッコいい産業で技術がないとできません。それを安全にこなせる人間が高い給料をもらうようにオーストリアではなっています。オーストリアのウィーンでは、木屑が大量に発生するようになったので、木屑と水力で必要エネルギーの3割ぐらいまで賄うところまでできました。木屑が大量に発生するために国内で石油の約半分の値段で木屑が燃やせるようになっていきます。ペレットは、軽いので、空気などで飛びます。ガス管みたいにペレット管が配管されていて、そこからペレットが供給されて、燃える仕組みになっている町もあります。この国は、ウィーンにIAEA(世界原子力機関)の本部が置かれていますが、原発はありません。造りましたが、稼働前にやめて公園になっています。

最近、木造高層建築が建築業界ですごく流行っていますので、インターネットで検索するとたくさん出てきます。木造ビルのイメージがよくわからないと思いますが、オフィスビルやマンションは、むしろ外装は木造に見せかけないけど、柱や梁は全部木にします。みなさんの思っている木造のイメージと全然違うのは、高い建物を木造で建てているということです。そして、全体的に鉄を使っていないのですごく軽いです。あとは、木はあったかいので、暖房効率がよいそうです。

木造高層建築ができる大きな理由は、防火技術が発達したからです。もし昔みたいに白木で作っていると燃えますが、今は、集成材で作ります。それは、木を5センチくらいの板にして互い違いに張り合わせたものです。だから、大きい木でなくても半端モノの木でつくれます。それを使って柱や壁をつくって燃やすと、中が燃えていても熱を伝えないので外を触っても全く熱くなりません。そのため、延焼しません。しかし、鉄は中が千度で燃えていたら外側も熱が伝わってものすごい温度になり発火してしまいます。だから、マンションは延焼していきま。さらに鉄だとある程度の温度になると溶けて飲みたくなって壊れてしまいます。ところが、木は溶けないので燃えても炭のまま建っていますから崩落しません。さらに木自体が燃えないようないろいろな加工があります。

日本でも横浜の港北ニュータウンのニュータウンセンター駅の近くにあるショッピングセンターは、1階までは鉄筋コンクリートですが、2階~4階は柱から全部木造です。すごく軽く見え、事実、重量が軽いので地震にも強いです。そもそも木造高層建築は戦前いっぱいありました。日本の旅館や道後温泉本館もそうです。このような技術は、日本の五重塔などの木組みを使った技術の研究から実はスタートしています。よくある話ですが、日本人にとって新しく見えるものでも、実はオリジナルが日本だったということです。ちなみに実は建築家も日本人であるケースが多いです。

例えば、スイスのチューリッヒのメディア会社であるタメディアの本社は、木造オフィスビルです。柱や梁が全部、木で、まさに五重塔のような工法のものを組み立ててできています。これを設計したのが「板茂(ばんしげる)」という日本人です。タメディア本社は場所によれば三十三間堂みたいな空間になっており、すごくおもしろく、日本のいろいろな木造建築のエッセンスが全部つぎ込まれています。このような動きが、今、日本人の気がつかないところで進んでいます。

その結果として、国産木材を使った集成材を使って、このような建築物が増えるようになると、たくさん木屑が発生します。その発生した木屑をペレットにして発電をしたり、ストーブで燃やしたりすると現状でも石油とだいたい同じぐらいの値段が、石油よりも安い値段で手

に入ることになります。今、その循環の一手手前まで来ていますが、なかなか踏み出せない理由が2つあります。1つ目は、木で建てようという人がおらず、鉄骨、新建材で全て建ててしまうことです。

2つ目は、建てる時に外国産材を使うことです。東京で林野関係の人に値段がどれくらい違いますかと聞きました。「国産の方が2割くらい高い。モノによってはほとんど同じか1割高いくらいまできています」と言いました。みなさんは、「国産材が2割高くこれは大変だ。こんなに値段が違っては勝負にならない」と思いませんか。それとも「2割しか変わらない」と思いませんか。他のもので考えると国産と外国産はどれくらい値段が違うのでしょうか。お米は7倍、肉は8割から2倍くらい、野菜は、国産のブロッコリーの方が3倍くらい高いような気がします。水は、550ml＝150円、1ℓ＝300円です。水は、例えばインドネシアから輸入したら1ℓ＝20円のペットボトルがありますし、水道水はもっと安いです。つまり、木材になった瞬間に値段が1～2割違うから外国産しか使わない人たちが、1ℓ＝300円の水や国産野菜を買っているのに、どうして木材だけが外国産材でなければ競争力がないと断言できるのかということです。いい家を木造で建てれば大きい家は約3千万円かかり、そのうち木材の代金は5%くらいです。1～2割違いは、せいぜい15～30万円の違いです。「30万円値段が上がるが、国産材にする」というオプションがあったら国産にするという人も結構いると思います。全員でなくても2割でもいるだけで、おそらく内子あたりの製材所の仕事が増えるでしょう。

日本の製材所や建築業界は、「国産材だから高くしましょう。」ということでお金を払う施主が10人に1人くらいいる、ということを見つけようというマーケティングがないわけです。また、「国産材は嫌でも愛媛県産材だったら使うかもしれません」と言うところが政策ですぐ、補助金をつけます。私は、「それはやめて」と言っています。300円の水に補助金をつけていないように買う人はおり、ちゃんと払う人は払います。そのような価格補助金はなしで、県産材、国産材を使って建てる人を1人、2人と増やして、町の中に先ほどみたいな木造建築ビルが建ち始めれば、世の中にはお金持ちがいますから必ず真似をする人はいます。温泉旅館やマンションも

アットホームな形で建てればかっこいいと思います。それに住んでみようかと言う人は必ずいます。世の中、そういう人が10人に1人くらい出てくるだけで確実に木の利用は、増えるわけです。

Ⅲ 実践②耕作放棄地の再利用

実践② 耕作放棄地の再利用⁶

耕作放棄地は無用の土地なのか：

- ！先人による多年の土作りにより、肥えた土がある
- ！先人による給水システム造りにより、水もある
- ←しかし多くが狭い圃田で、大規模経営に向かず、担い手は引退
- 始まっている新たな取り組み(NHK広島制作の番組の中から)：
- ！島根県邑南(おひなん)町「味蔵」[耕すシェフ]←肉と野菜
- ！鳥取県八頭町「ホンモロコ養殖」←淡水魚
- ！島根県石見山中「州濱さんの牛乳」←牛の放し飼い
- ！山口県周防大島町「ジャムズガーデン」←果実
- ！広島県尾道市「おへぞカフェ」←茶「尾道帆布」←綿
- ！広島県庄原市「優輝(ゆづいん)グループ」←半端モノ野菜

さて、里山資本主義の番組で、「木の燃料利用」と並んで話したのが、「耕作放棄地を利用しましょう」ということです。私の選ぶ三大里山・里海活用事例は、島根県隠岐郡海士町と鳥取県八頭郡智頭町と島根県大田市大森石見銀山です。昔から有名で何度も番組になっているので、今回は取り上げなかったということでこの番組では出てきませんでした。しかしながら、最近出てきた事例もいっぱいあります。番組の中で紹介した事例にはいづれも共通しているポイントがあります。

例えば、島でできた半端モノの農産品を使って、若い夫婦がジャムをつくっている山口県周防大島の「瀬戸内ジャムズガーデン」があります。ただ、若い人がつくっているわけではなくて、かなり立派な会社になっていて、30人以上の人を雇っています。奥さんが島出身で戻ってきましたが、旦那は関西電力の元社員で京都の人です。島に奥さんと移り住んできました。この島には移り住んできた人がたくさんいますが、移り住んだ人たちが次に移り住んでくる人たちの世話をし、どんどん移らせるなどいろいろな地域活動をしています。周防大島は日本一高齢化した島ですが、ついに出ていく人よりも入ってくる人の方が多くなり、その傾向が定着しつつあります。普通、田舎というのは子供が育ったら出ていきますから入ってくるよりも出ていく方が常に多くなります。ところが周防大島はあまりに高齢化してあまり子供がいません。あまり出て行かないところに移り住んでくる若い人

が増えて、カフェなどをやりながら暮らしているのです。

最大の特徴は、その月にとれた島産の半端モノ果実しか使いません。だからモノによっては数十瓶しかありません。季節ごとにどんどん変わります。周防大島は年寄りしか住んでいなくて、年寄りが庭先で果物をつくるので市場に出ない半端モノが多くあります。自家消費していましたが、年を取って面倒だから捨てていたものをジャムにしました。実に多くの種類の柑橘や農産品でジャムがつくられています。リンゴだけは山口県内の別のところで作っていますが、あとは全部島産です。多くの種類のジャムをつくりまして、行った時には、その時期のジャムしかなく売切れたらなくなります。常に同じものがあるコンビニエンスストアの逆の発想です。

もう1つの特徴は値段が高いということです。買う人がいるからでオンリーワン、今しかないから本当は千円以上の値段で売ってもいいのです。ちなみに瓶は小さく、普通みなさんが考えるジャムの値段の2倍以上です。里山に住んでいない人たちに売るわけですから高く売らなければなりません。そのことをちゃんと彼らはできているわけです。その分、30人程度の雇用を生み出しています。そのほとんどが老人で元気になり、いろいろなことをしてお金を使ってくれます。若い人も雇い、1ターンした人が食べられるぐらいの給料を払います。半端モノの農産品で捨てていたものを高く売って人を雇い高く循環させ世の中をよくしているわけです。

「里山資本主義」的地域活性化¹³

① 安さでは勝負せず高品質の商品で外貨獲得:

当地独自の生活文化に支えられた、ハイセンス・少量・高単価の「地域ブランド商品」「生活文化観光」で外から稼ぐ(「いま」「ここ」にしかないもの)を売る。

② 稼いだお金をもっと地域内でぐるぐる回す:

地域内産の食材、建材、人材の質を上げて地元で使い倒し(外からの安物は使わない)、未就労女性や障害者を雇用し、時短で「時給」を高め、兼業を奨励する。

③ 外から買うより地元産のエネルギーを活用:

地域内の建築物には地元産木材を使い、木屑の燃料利用を進める。小水力・風力・地熱を余さず使う。

同じく里山資本主義で紹介された中で素晴らしい事例だと思うのが、島根県邑南町の「味蔵」です。これも同じようなことをどこでもやっていますが、ある意味、最もやりぬいた事例です。村が昔のふるさと創生資金や補助金などでレストランをつくりました。このレストランにはいくつかの特徴があります。1つは最初から黒字だ

ということです。設備は補助金で作りましたが、ランニングは完全に黒字で、補助金は投入していません。そして、基本的に出しているものは全て町内産です。町内のものを活かして、高い値段で売ろうとするわけです。しかしながら、島根県の豪雪地帯の山奥で不便なところですから、そんなに人は来ません。そこで、大阪リッツカールトンの若くイケメンで町出身のすごい腕利きシェフを呼び戻してきてやらせました。お菓子作りがすごくうまいパティシエールがいて、彼女も地元の人です。さらにソムリエまでいて、この人も修業して帰ってきた地元出身の人です。この3人が本格的な供給をするわけです。スタッフはシェフの見習ですが、よそから1ターンさせたりして臨時で雇っています。そのスタッフは、地元で農地を耕しながら夜、調理をしています。さらに生産者や地元の農業法人などいろいろ地元の人が関わっています。この山奥にあるこのレストランは、イタリア政府が選ぶ日本のベストイタリアンレストラン50(30以上は東京)の中に入っています。

それでひとつ問題が生まれました。山奥でやってもなかなか客が来ないはずが、実際にはすごい客が来てオーバーキャパシティになりました。これは重要なことで、みなさんならどう解決しますか。

例えば、「予約制にする」方法があります。しかし、予約制にすると予約する人はしますが、予約せずにたまたま寄る人もすごく多くいます。そのときに予約制にしていますと言うと逆に来なくなります。予約のドタキャンもすごく多くてなかなかうまくいきません。

また、「2店舗目を出す」という方法は、1人のシェフではできないし味も落ちます。さらに、「単品メニューにして手間がかからないようにする」方法がありますが、それでは今日とれた素材を今日出すということを前提にすると、日によりメニューが全然違うことになり、単品メニューにはなりません。これらの意見より、もっと本来の主旨からするといい方法があります。それは、「値段を上げる」ということです。里山資本主義を成り立たせるためには、売れないうちから高いのはダメですが、高くても売れるものはちゃんと高く売ることです。1人のシェフがしっかり作って、地元産素材で出すからには、値段上げて、その分、素材を入れている業者や生産者にたくさん払うべきです。そうすると地域内でお金が回り

ます。それを自分が貯金してしまうとマネー資本主義になります。きちんと作っている人にお金を支払ってはいじめて地域振興になるわけです。あるいは、貯めておいて、より地域産材を使った建物に建て直すことでもいいわけです。

ここでは値上げして案の定、客が減りました。しかしながら、当然、客が少々減っても値上げしたので、結局、売り上げはやはり増えました。これが本来の商売です。島根県の田舎で運営している町役場の人がこのようなシステムをわかっているわけです。

IV 実践③ 町の住民にできること

実践③ 町の住民にもできること

最も簡単なこと:

- ！ エコストアフを入手し、水源を確保する（#井戸など）
- ！ 自営の店で買い物し、経営者と仲良くなっておく
- ！ 特定の田舎に通って産品を買い、絆を作っておく

もう少し進めば:

- ！ 庭や空き地で農耕し、自家消費/物々交換する
- ！ 特定の田舎に田畑/セカンドハウスをつくる

最後には:

- ！ 好みの田舎に移住する/季節ごとに転々とする

里山資本主義はサブシステムなので、マネー資本主義と、お好きな比率でブレンドして実践可能！

私は街に住んでいるから関係ないと言う人がいるかもしれませんが、できることはあります。何かあったときのために井戸をもっておく。東京では実際に震災の時にあったことですが、商店街で買い物をして経営者と仲良くなっておくと何かあった時にちょっとモノをくれるかもしれません。特定の田舎で産品を買って絆をつくっておくとたまには何かくれるかもしれません。庭や空き地で農耕し、自家消費、物々交換をちょっとしておく。南予の方にセカンドハウスを借りておく。さらに好みの田舎に移住するか季節ごとに転々とすることもできます。里山資本主義はサブシステムですから人生に3～4度、東京と田舎を往復したっていいと思います。ずっと松山にいらなくても子育て中だけ大洲にいるなどいろんな時に場所を変えて、ステージごとに移住するというのもっと日本人はやっていいと思います。それでついでに元気なうちは畑をつくり、元気がなくなったらベランダ農園だけにするという風に自由にやったらいいと思います。全般的に言われているのは、農業とか園芸をやっている人の方が年を取ったあと健康な比率が高いそうです。

自分の年齢、ステージにあわせて街と田舎をうまくミックスして使った方がいいという話を東京ですると、田舎に行くのが遠いと言う話になります。しかし、実は愛媛県は里山資本主義をやるのに、これ以上の場所がないくらいすごく恵まれています。すごく暖かい島、熱帯に近いようなサンゴ礁があるところからおとなしい海、そして、高原で雪が降るところまで全部あります。おまけに松山という適度な都会もあります。愛媛県に住んでいる人はみんな里山資本主義をやっているのではないかといいくらいです。実際、愛媛の人はだいたいやっていて、やっていないのは一部の松山の都市化した住民だけです。これを県内でやっていくといいことがおきます。まずはGDPがどんどん下がります。なぜかと言うと物々交換ばかりしているからどんどんGDPが下がります。しかし、その一方で「瀬戸内ジャムズガーデン」や「味噌蔵」みたいに一部、高く売れるモノは高く売れるものが出てきて、少しGDPは盛り返しますが、たぶん全体としては下がります。どんどん下がれば、そのかわりお金の換算できない安心・安全が増えていきます。

今、日本は世界の先進国の中で、一番木がたくさん生えている国です。今だに面積の7割以上が木です。しかも、耕作放棄地が森に戻っているので、その面積がだんだん増えています。ところが日本が一番木材の自己利用をしていない先進国です。アメリカ行くと家はほとんど木ですが、日本では誰も木で建てていない。5～10年で劇的に雰囲気を変えることができると思います。日本の田舎オンリーのラッキーな話です。愛媛県の場合、みなさんがもう少しその良さをアピールしていただくと少し東京あたりから元気な年寄りが選んで帰ってくるということになるのではないのでしょうか。長時間どうもありがとうございました。

[平成26年2月12日（水）於：愛媛大学南加記念ホール]

Profile 藻谷 浩介（もたに こうすけ）

山口県生まれの49歳。平成合併前3,200市町村の99.9%、海外59ヶ国をほぼ私費で訪問し、地域特性を多面的に把握。東大法学部卒業、日本開発銀行入行、米国コロンビア大学ビジネススクール留学、日本経済研究所出向などを経ながら、地域振興や人口成熟問題に関し精力的に研究・著作・講演を行う。

2012年より現職。近著に「デフレの正体」、「里山資本主義」（共角川Oneテーマ21）、「金融緩和の罠」（集英社新書）。